戦時の女学生生活の想い出

北九州市若松区　　中野　清子

戦後５０周年を回顧する。私は現在６７才。５０年以前戦時のさなかの１７、８才頃の記憶をたどりながら想い出をつづる。

昭和１５年４月、１５才、県立八幡高等女学校に晴れて入学。当時はそれ程ひどい戦時色ではなかった。特別印象に残っている事は、１年生の時から英語が廃止。そのかわり珠算。

毎週１回、全校一斉に学校放送による早朝漢字テスト。轟沈・襲来・戦闘機・勤労奉仕・学童疎開等の戦時にかかわる熟語で、新聞に掲載されているものばかり。体育は主として天突体操、四列横隊での行進、時には木型の銃を肩にかけての行進、剣つきで藁人形を突く、その他弓道の礼儀作法等であった。

学校には将校が配属されていて、きびしく訓練を受けていたが、その姿のりりしさにあこがれさえ持っていた。また、裁縫の時間は兵隊さんの衣服のボタン付け等もした。

ところが昭和１６年２年生の時、風邪をこじらせた上鍛錬行軍で無理をし肋膜炎をわずらい、食糧不足に伴う栄養不良でなかなか体力が回復せずに、一時休学を余儀なくされた。

平成７年１月、９０才でなくなった母の苦労は、当時一方ならぬものだった。農家に親戚のない我が家は、５人の発育盛りの子供と病気の私。母の手厚い看病は、乏しい衣料の中の特にその頃の母の一張羅の着物が次々と食糧に変わり、私の一命もひろってくれた。

その年昭和１６年１２月８日未明、真珠湾攻撃で、第２次世界大戦が勃発した。

その後、学徒動員令が出され警戒警報が出ると、最寄りの開業医に詰め、救護班として活躍。空襲警報が出ると、近くの橋の下に避難。橋の下から眺めた夜景は、暗闇の中での月や星の美しさ、探照灯で照らし出される敵機を眺め、川辺の草むらに鳴くこおろぎの声。

今もなお懐かしく想い出される。行動を共にした友達も今、６７才。音信不通のまま。

その後、昭和２０年８月、終戦迄、八幡製鉄所の中の尾倉鋳鋼で兵器の部品作り、来る日も来る日も鋳型を土にうめ、鉄の棒でまわりを突いて固める。上下の鋳型をぬいて合わせ、溶鉱炉でとかした銑鉄を流し込む。冷えてから製品を取り出す作業。最後まで何の部品なのか。何に役立っているのか知らされずに終わった。

通路をはさんで隣は八女工業の男子の学徒動員生、彼等は寮生活を送っていた。

作業内容は、私達より大きな鋳型で数人で取り組んでいた。銑鉄の流し込みもダイナミックなものであった。

その作業場での想い出と言えば、学徒同士のラブロマンス。今から見るとそれは、切ない程幼稚で、淡い淡いうたかたのような恋心だけ、付け文程度で話した事もなければ勿論今風のデート等あろう筈もない。付け文の相手が誰やらとうとうわからずに、昭和２０年３月上旬、別れも告げずに引揚げてしまった。

私達も、昭和２０年３月下旬、女学校４年生も一応卒業式を迎えた。

当日は工場を休み、女学校の講堂に４年生４００人全員集合した。上着は制服、下はモンペ姿、防空頭巾・布カバンを肩からかけ、式場へのぞんだ。学校長の重々しい立ち振るまいの上での教育勅語が述べられようとした時、突然警戒警報なしの空襲警報。細ぎれ１０回。取るものも取りあえず防空壕へ避難。大刀洗に米機１００機の連隊との情報。その日は、卒業式の間にもう一度の空襲。わずかの間に２回も避難をしたが、幸いに戦災に合わずにすみ、どうにか卒業証書を手にすることができた。

その当時は、県知事賞・黒田賞・学校賞・優等賞という賞があって、卒業生４００名中、２０名の受賞。私も優等賞を頂き、賞品は木箱のべんとう箱だったように思う。この賞は本人より今は亡き母がことのほか喜んでくれたことを覚えている。

卒業後は専攻科へと全員横すべり、卒業と同時に海軍将校で戦中の花嫁さんになった友達もいた。私は居住地が若松だったので、徴用のがれのため若松の三菱化成に勤務したが、わずか５ヶ月ばかりのことだった。

特に、強烈な想い出として残っている事は、昭和２０年８月６日の八幡大空襲。昼頃から夕方にかけて、焼夷弾が雨あられのように降る若松の対岸が八幡製鉄所。敵機は八幡製鉄所を目標にした。八幡大空襲では死者、負傷者共に多くの犠牲者が続出。若松も１９９号線沿い若松駅から藤木・二島にかけて、焼夷弾で多数の家が焼失。着のみ着のままで逃げまわった。当時私は、若松でも小石海岸の方に居住していたので、直接被害は受けなかったが、風に乗って焼けこげの布切れや紙切れ、黄な臭いにおいの風が、小石の涯まで飛んで来た事を思い出す。

その夜、関門方面も、雨あられのような焼夷弾に見舞われた。その様子を小石の海岸の防空壕の中から見た。その光景は、天をこがすような夕焼雲がいつまでも続いていた。

昨年から、八幡大空襲での慰霊祭が当地のお寺で５０周年を記念して行われている。

その当時の想い出話も語りつがれている。

その後、引続き広島・長崎の原爆。８月１５日正午の終戦を告げる玉音放送。ラジオの前で信じられぬ敗戦の終結を知った。

私達の学生時代の青春は、戦争と戦災、食糧難、無いないづくし、それでも心の中は満たされていたような気がする。

戦後５０年。日本の復興は目ざましい進歩を辿った。皆、心を一つにしての目的があった。だから、誰一人、不平不満をもらす者もいなかった。長い苦難の礎があってこそ、今日の日本があるのだ。私共は、これからの日本を背負う戦争を知らない、我が子や孫に当時の体験を語りつぐ責任を感ずる。

日本人よ！あまりにも満ち足り過ぎて「心まで見失うなかれ」。戦時中のような隣人愛を持って、やがて到来する超高齢化社会に立ち向かって生きたいものです。

今私は、ここ６年ばかり、老人クラブの役職を持って働いております。全国老人クラブ連合会のテーマである健康・奉仕・友愛の三大目標の中で、私達の年長者ができるボランティアに、目をむけて行こうと思っております。